

平成十八年三月一日発行 第十六卷第三号 通巻第一七七号（毎月一回一日発行）
平成二年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成18年3月号



寒月光

高橋将夫

今年こそと
言うて始まる
今年かな
背を向ける男に
焚火燃え上がる
よくわかる絡み具
合や蔦枯るる
木の葉散るなか
で頭を休めをり

材料はまだまだあるぞ鯨鍋
モナリザの口元さみし寒牡丹
凍滝の中に眠れる鋭気かな
大年の別々にある白と杵
一叢の石落の花ただよへる
柵の花陰にゐる天邪鬼
波となり粒子となりて寒月光

冬 銀 河

奥村邦子

波音を円心にして木の実落つ
冬蝶の風に掬はれ日の方へ
冬麗の朝日を破る鴉かな
大空へ河馬の欠伸や小六月
強霜と一本つつの木影と
湖に冬虹かかり音消ゆる
大日のまなこを集め山眠る
振り塩のきらきらとして氷点下
雲間より神のひかりか初氷
天地の妙音となる冬銀河

特別作品

年の暮そわかそわか
の落暉かな
谷川の神代のひかり
冬の蝶
天帝の口元に
触れ寒椿
虚空よりひかり
集まり氷張る
雪のせて
幻想曲の杉の山
冬萌や金剛力の
日をためて
落葉踏む天が
ふはりとして
来たり
鶴凍てて大日の
耳澄みてをり
山脈や鳥獣戯画の
冴ゆるなり
冬泉の底より
天の声ありぬ

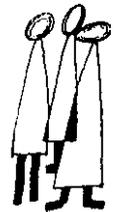
槐安集

市場基巳

雨暗しゑんまこほろぎのみ鳴いて
虫の闇なほ濃き方へ入りゆきぬ
竹伐りしあとぼつかりと澱める陽
齡はや古稀すぎ日毎秋めく雲
風荒れて凧ずこのまま冬来るか

水野恒彦

けとばしに嶺の曇つて来たりけり
冬麗の魑魅とあそぶ櫃の下
空海のくつさめ山の氣の緊まる
大年の焚かれてゐたる菊の塵
竜骨の眠るあたりの霜だたみ



石脇みはる

元旦の風に吹き飛ばされしもの
大年やこまぎり野菜の五目飯
啜坂葉付二股大根かな
塩竈の玉^{たいらぎ}瑠さげてもどりけり
冬の谷^{のすり}鷲とびたつところかな

竹内悦子

誰よりも早く並ぶ子大根焚
実南天米櫃に米満たしをり
烏^{くろちく}竹や魂やどる石冬に入る
狐火やそろそろシチュー煮える頃
法堂の冷たく光る柱かな

延 広 禎 一

無量光にうんともすつともなき海鼠
入鹿の首すつ飛ぶ絵図や冬紅葉
魴鮓に声ありにけりなむさんぼ
首塚に冬の日差と吉備団子
水飲んで浄土双六ひろげたり

栗 栖 恵 通 子

触覚を畳んでゐたり冬帽子
雪安居膜のうちなる五体かな
筆^{ひちりき}築の音の氷柱となりにけり
越山に狐火なんぞ借りにける
太箸や飯盛山を真正面

中 島 陽 華

羚羊飛ぶコロンプスの卵かな
白葱の甘さとろりと水ゆたか
細^{せいのう}男のめくつてゐたる伊勢暦
褐色のシロップと冬の大落暉
こがひなこととなりまして冬木立つ

加 藤 み き

あらたまの凍つる巖に朝日影
大人の手桶の中の水仙花
団子花雨のち晴の日を給ふ
頭に土に日ざしあまねし枯木山
鴛鴦の目のすばやく動きゐたりけり

大島翠木

身のユダを冬満月に放ちけり
その指輪ことさら寒き光かな
雪原は鳥獣戯画の画布とこそ
仏展や冬芽しばらく見て去れり
はらからの骨抱き見つむ冬のダム

嵯野軒の念十符を生地矢作ダムに流す

雨村敏子

仏頭に悌のあり烏瓜
枯れきつてより蓮池の澄んでゆく
丸朮に黒豆干すや神迎
冬至南瓜いつもこの時笑ひごゑ
年の火の烟ながるる鳥居かな

小形さとる

暮れかかる喉のんどあたりの小六月
目貼して鱗いりこのごと笑ふなり
蹠あうらにてやうやく雁の渡りかな
紅葉かつ散りコーランのたぐひかな
酢莖漬静処じょうじよよろしと宣のたまへり

黒田咲子

北窓をふたぎ孔雀の羽に風
青九谷よひから雪となるらしく
渋柿の種なし大実さむげなる
野水仙苞に潜水橋わたる
酢海鼠やこのごろ踵ざらざらす

槐市集

植松美根子

黄葉山鳥の群れて戻りきし
椰の木のも冬も緑や牛の墓
寒椿墳の石段短かかり
臘梅やおもはず他所の庭に入る
パソコンのフリースしたる師走かな

宇田喜美栄

あかときや冠雪の山ズームイン
知らぬ貌して野鼠ねらふ梟よ
童謡の時報流れし柿すだれ
埋火を組みなほしてや去年今年
初日の出天空の湯に浸りをり

大山里

冬薔薇広間は誰もぬなくなり
短かき電車枯れ芦の上走る
群鴉消えぬる冬の夜晴れかな
草を踏み年の境の近づきぬ
袈雨のホテルを発ちにけり

奥村邦子

散る紅葉散らぬ紅葉や天透ける
初氷路傍の石に声生まれ
鳥獣戯画泡閉じ込め氷張る
雲割れて山顛の雪光り合ふ
寒林の日当たりにて空軽くなる



槐集

高橋将夫選

琵琶の音に紅葉の海の展かれし
枚方

中野 京子

生まれ出る前に似たりし枇杷の花
安城

天野きく江

冷えびえとめぐる館の火焰土器
朝の日の空にとけだす枇杷の花
大空に鳥鳴きかはし大根引き
生き生きて冬菜の虫をつまみ上ぐ

地に還る星の輝き霜柱
岡崎

近藤 喜子

マグダラのマリアの化身雪の精
岡崎

岩月優美子

波長ぴたと白佗助と一つ星
こぼれ出る発心のいろ龍の玉
曼陀羅の織り込んである氷かな
七星の柄杓のこぼす時雨かな
角大師源氏の庭の枯れてをり

京都

竹中 一花

大日や一炷のあかり石路の花
東京

西村 純太

雪の味したる酢莖を貰ひけり
居酒屋のあかりの奥や一葉忌
弁天や襦袍買ひたる中書島
百鬼夜行冬の稲妻走りをり

汝と我の掬ひとりたる玉霰
虎落笛星の落ちゆく砂時計
兩忘や行先みえぬ枇杷の花
直面と癒見がみたる狐火か

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

生き生きて冬菜の虫をつまみ上ぐ 中野 京子
命あるところに、別の命がある。冬菜にも虫はつく。冬菜も虫も寒い冬を生きている。菜虫を取りながら、自分の生きざまを思い、冬菜と虫の命を思う。「生き生きて」はそんな感慨から思わず口をついて出た言葉だろう。

曼陀羅の織り込んである水かな 近藤 喜子
花水なら涼しくて、美しいだけだが、曼陀羅の織り込まれた氷となると尋常ではない。そもそもマンダラは「聖なる空間」であるが、雑物を一切排除して純粹性を追及するものではなく、逆に多くの異質的要素を包含しながら、しかも全体的には、高次の価値観によって調和して成り立つような世界を象徴している。いま、この水の解凍が希求される。

雪の味したる 酢茎を貰ひけり 竹中 一花
「雪の味する酢茎という感性に脱帽。「酢茎に雪がついていた」などの解説は艶消し。直にその味を貰味できなくては俳人として淋しいと思う。」

生まれ出る前に似たりし 枇杷の花 天野きく江
枇杷には20cmほどの葉に小さな花が身を寄せあうようにかたまつて咲く。そんな花に母体に宿る無垢な命のようなものを作

者は見たのであろうか。

マゲダラのマリアの化身雪の精 岩月優美子
マゲダラのマリアはイエスの足に接吻し回心した元遊女。美術作品では香油壺を持つ長い髪の女性として表現される。雪の精をマリアの化身とみたのはきつとピュアーさのゆえだろう。

両忘や行先みえぬ 枇杷の花 西村 純太
「両忘」とは禅で善悪や迷悟、苦楽など、全ての対立する概念を忘れ去った自由平等の境地をいう。あらゆるものへの執着が断ち切られた、自在の心境であるが、行き先が見えないという作者が枇杷の花に託した心境は何か。私は明暗も、主観も客観も、写生も抒情も一如となった俳句の世界を思っている。

居心地のよき 円卓のふぐと汁 谷村 幸子
居心地のよい円卓というからには、よほど氣のあう仲間同士なのだろう。ふぐだからといって別に危ないわけではないが、チョッピリ、シニカル。

大笹をかかへきたりし 鴛鴦の池 近藤きくえ
鴛鴦が仲よく池に浮かんでいる。そんなところへ大笹を抱えた人が来たという。大笹を抱えた人と鴛鴦の無関係の關係がなんとも面白い。

厄落し水の流れの早さかな 植木 戴子
流れゆく大根の葉ではないが、まるで厄まですみやかに流れ去るようで爽快な気分になる一句。